銀天エコプラザ通信

第165号
（2025年4月1日発行）

4月

ESD（持続可能な開発のための教育）の現状と問題点

うべ環境コミュニティー　理事長　加藤泰生

しばしば私達はESD（持続可能な開発のための教育）とSDGs（持続可能な開発目標）とを関連付けて論じています。ことSDGsの到達目標の考え方は、自治体（宇部市の場合はSDGs未来都市）の広報・活動やTVメディアの特別な番組などで、周知のための機会が提供され、その結果、大多数の一般人や教育機関においては、広範に知られるところとなっています。

しかし、SDGsを熟知している彼らも、その普及・促進のディレクターとなりえているのかと言うとすでに、この目標を国連が掲げて10年超の経過にもかかわらず、その成功事例が少ない。うべ環境コミュニティーがESD活動を始めて7年目に入るが、その活動へのSDGs目標に準拠したプログラムとの連携項目が、相変わらず未だに綿々と引用され、具体例に乏しい限りです。（参照、直近のエコプラザ通信、第155，158，160，162号）

時系列的には、2013年にユネスコ総会にてESDの活動方針が採択され、翌年国連総会にて承認されています。現在、世界の潮流がどこにあるのか私の勉強不足から、明確に把握できていませんが、この時の「ESDに関するグローバル アクション プログラム(GAP)」が始まって、すでに10年超経過しています。

世界のESD推進拠点であるユネスコを手掛かりに検索していけば、そのあたりの基本情報は些少とも得られるであろうが、今の時点で現状を知るまでには至らない。

なお、ESD活動に関して一端を文部科学省の後押しで行っている事業、“SDGs達成の担い手育成（ESD）推進事業”を垣間見ると（表１を参照）、ここ3年間、申請件数にほぼ増減なく、採択数の確保から、その採択率が上昇しています。さらには、カリキュラム等開発・実践に占める教育系を有する大学がほとんど採択されており、如何に、人材育成にかかわるハードルが高いかを物語っていることも、この活動のすそ野が広がらない例証のような気がします。

表1　SDGs達成の担い手育成（ESD）推進事業　（件）

	令和6年	令和5年	令和4年	令和3年
応募数	19	21	20	36
採択数	11	11	12	14
採択率	0.58	0.52	0.6	0.39
①カリキュラム等開発・実践	4（3）	4（4）	3（3）	5（3）
②教師教育の推進	5（4）	5（5）	7（7）	6（6）
③多様なステークホルダーとの協働による人材育成	2（0）	2（0）	2（0）	3（0）

（）は教育系大学数、 文部科学省HPよりデータ加工

中川河口で清掃活動（宇部日報SARATTO）

今年2月25日に実施した中川河口ヨシ原清掃活動について、宇部日報デジタルSARATTOで紹介していただきました。ありがたいことです。ぜひご覧ください。

https://youtu.be/AsGJkHho_NQ

宇部市まちなか環境学習館 銀天エコプラザ

〒755－0045　山口県宇部市中央町二丁目11番21号

交通手段　ＪＲ宇部線：「宇部新川駅」徒歩7分

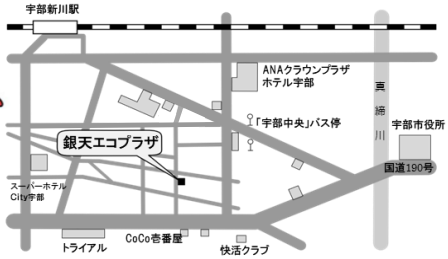
宇部市営バス：「宇部中央バス停」徒歩3分

駐車場 無し　(近隣の有料駐車場等をご利用ください)

TEL/FAX　0836-39-8110　E－mail　ubekuru@gmail.com

開館時間　9時～17時　　HPアドレス　http://ubekuru.com/

休館日　　土･日、年末年始（12月29日～１月３日）



HomePage　facebook　x

NPO法人うべ環境コミュニティー

この通信は宇部市環境政策課からの委託を受けて環境情報の発信のために発行しています。

ライトハウスが取り組む SDG‘s

合同会社 Lighthouse 代表社員 瀧口堅太

ライトハウスが考える SDG‘s、それはどの文章を見渡しても「人」を主体とした考え方が記載されている。その中でも多くが行動指針を書いているが、私どもは行動に至るまでの「心」にフォーカスしており、子供たちに少しでも多くの豊かな「心」を育み、社会問題になるような行動にならない考え方を伝えている。例えば、サーファーでいうと海岸清掃をよくやりますが、そもそもゴミを捨てない「心」を育む。それは海の大切さを言葉で語ったり、実際に海で遊んで体感したり、

シーグラスを一緒に拾って、フォトフレームなどデザインしてもらい、ゴミではなく資源であり、そこに自分のアイデアで新たな価値を生むことができ、可能性を広げることができることに気づいてもらう。それを、地元の子供支援をされている団体とイベントを開催したり、商工会議所の地元の祭りを通じて海の魅力を発信したり、地域の小学生にキャリア教育として伝えに行ったりしている。Lighthouse（灯台）は地元住民を光で照らし道しるべを創っていき、共に成長し、共にいい景色を眺めたい。
また、イベントや建築業を通じて豊かな Life style を提案し、豊かな「心」を育むことで、子供たちがより未来の地域を輝ける町に発展させることができるようにお手伝いをすることが私どもの使命ととらえている。
海と出会い、サーフィンをすることで色々な世界を旅するようになり、世界中の人達とコミュニケーションを図ることをきっかけに、様々な価値観を認められるようになった。サーフショップのライダーを経験

させてもらうことにより、人に支援してもらってこそ、自分が輝ける舞台を与えてもらうことができ、また支援してもらったからこそ次世代に貢献する責任があると考えることができた。人は一人では決して何も成し遂げれないことに気づかされる。
「自由」という世界に高校を卒業して飛び込み、自由ほど自己責任でビジョンがないと何も生まれないことを知る。人に示されたレールに乗るのではなく、自分の意思で人生の計画を立て、行動し、様々な経験を経てその１つ１つが繋がり、現在の会社経営に生かされてるのだと思う。

最後に、「努力を重ね自分を最後まで信じること」ができれば必ず光が差し込めてくることを伝えたい。

「僕には鳥の言葉がわかる」　書評

宇部志立市民大学環境・アート学部OB会　山本和毅

今、いち推しの本を紹介できるこの機会に感謝します。本文はもちろんのこと、著者本人のわかりやすく、かわいいイラストも多数あり、シジュウカラの鳴き声も巻末の音声コードで楽しめるという至れり尽くせりの優れ本なんです。2023 年 4 月、東京大学の先端科学技術研究センターに世界初の動物言語学の研究室が開設され、シジュウカラだけでなく多種類の動物についても研究対象になる

ということで今後の成り行きが注目されるところです。
わくわくするような話が日本発で世界に発信されていくことになりそうです。
著者の鈴木准教授（41）が野鳥への興味が深まったのは高校生の頃、お年玉で双眼鏡を買ってからとか。それから鳥の研究ができる大学へ進み、尊敬できる先生との出会いもあり、更に修士課程へ進学。その後も別の大学の博士課程で研究を続けられた。その結果とうとうシジュウカラが言葉を持つ鳥であることを世界で初めて発見された。
長年にわたり軽井沢の森で著者が執念をもってフィールドワークされた研究生活を本書を読んで追体験してみませんか？